

天理教の救援活動について報告

— 宗援連第1回情報交換連絡会に参加して —

金子 昭

宗教者災害支援連絡会（宗援連）の第1回情報交換会が4月24日、（財）東京大学仏教青年会ホールにて開催された。宗援連とは、先月号の研究所ニュースでも触れたように、東日本大震災への様々な救援・支援の活動に際し、諸宗教が相互に連絡を取りあい、情報の共有と協働関係をはかるために、4月1日に設立したネットワーク組織である。天理教は、他の主だった伝統宗教・新宗教教団とともに設立時から参加をしている。

今回、天理教からは総務部総務課の鈴木正一氏、信者部運営課の西尾典和氏、そして私（金子昭）が出席した。4月1日に設立した宗援連の最初の情報交換連絡会ということで、宗教教団関係者・宗教者はもとより、宗教研究者や一般メディア関係者など、約70人の参加者があった。我が国の教団だけではなく、台湾の仏教教団（佛光山）の日本支部からも僧侶2人が参加した。

最初に、島蘭進代表による宗援連の設立経緯と趣旨の説明、また稲場圭信、黒崎浩行、岡田真美子の各氏による宗教者災害救援ネットワークの内容の説明がなされた後で、宗教による実際の救援・支援についての報告が仏教および天理教からそれぞれ行われた。

今回は、とくに震災被災者の宗教施設への受け入れが主なテーマになり、仏教から東禅寺の事例（鈴木悦郎・松戸市東禅寺住職）、天理教から信者詰所の被災者受け入れ状況（西尾典和・信者部運営課員）が報告された。

東禅寺の鈴木住職は、地震直後から1ヶ月間、福島県からの避難者を受け入れた体験を語ったが、行政側との日頃からの人脈作りが重要であると述べた。西尾氏は、天理教では9月末まで被災者に信者詰所を提供していることについて述べた。この受け入れは、奈良県・天理市と連携して行われるもので、3月22日に設置された天理教震災被災者受け入れ対策室が窓口になっている。信者詰所では食費・宿泊費は無料で、3,000人の受け入れ枠を設けているが、現在のところ受け入れ者は少数に留まっている。

その他の天理教の救援活動としては、私が天理教災害救援ひのきしん隊（災救隊）による救援活動などについて報告した。災救隊は現在まで、岩手・宮城・福島の東北3県において、延べ3,000人余りが炊き出しやがれきの撤去作業などを展開中である。

基本的には自給自足・自己完結型の活動様式の災救隊であるが、現場で臨時に他団体との協働作業を行うこともある。今回、気仙沼市内でシャンティ国際ボランティア会の依頼により、同会の活動地域で重機を用いたがれきの撤去作業を行った。今後の課題としては、行政側の撤去作業や地元業者との調整、教内有志の活動のより有機的な協働作業や、宗教者ならではのソフトな面（心のケア）での活動の展開可能性などが教内でも検討されていると述べた。

質疑応答では、信者詰所での実際の受け入れ者が少数である理由として、被災者が現地を離れることを避ける傾向がある点、また避難者に対して布教活動が行われることはないものの、宗教施設なるがゆえに利用しづらいイメージがあることなどについて、西尾氏との間でやり取りが行われた。また私の報告に関しては、阪神淡路大震災の被災地との相違点が質疑に上り、津波の被災地は病気感染の危険もより高いので、災救隊では感染防止に留意して活動している旨を回答した。

これに関連して、炊き出しなども今後は、地元で食材が揃うものは、地元で買うことが求められているという意見や、宗教に対する抵抗感が出ないように、NPOなどの形態での活動も必要ではないかといった意見、また台湾など諸外国からの義援金の活用についての提案なども、参加者の間から提出された。

その後、大正大学院生の星野壮氏による、いわき市の被災状況についての現地報告、また東京大学の田代志門氏による、仙台での「心の相談室」開設の報告がそれぞれ行われた。とくに後者の報告では、宗教者が医療関係者とも協力して幅広い心のケア体制の充実が必要であると強調された。また、実際に現地で活動している真宗大谷派僧侶の川浪剛氏が、地元のニーズに対応できるような救援活動の必要性、仮設住宅におけるコミュニティの確立などについても問題提起を行った。

宗援連は今後、毎月の開催を予定している。今後の運営方法や組織のあり方に関して、基金の必要性や世話人制度などについても、随時検討していくことになった。



宗援連第1回情報交換連絡会の様子（宗援連提供）



天理教の救援活動について報告

第 237 回研究報告会 (4 月 22 日)

「場所」と「東洋的無」

荒川 善廣

「場所」としての魂

天理教の教義学や組織神学において、魂をどのようなものとしてとらえるかは、神論とともに、枢要な位置を占めている。たとえば、「元の理」解釈にしても、泥海の中に居たとされる水棲動物は魂の象徴であると考えられており、それは研究者の共通の認識にもなっている。しかし、まさにその魂とはどのようなものか、については原典には直接の記述はなく、研究者は古今東西の思想書を繙きながら、魂の定義をみずから考案するしかない。

西洋では、概して、カント以前の哲学者は、魂を思惟の実体としてとらえていたといえる。だが、カントの批判哲学によると、魂は実体ではない。つまり、カント以前の説は、魂を「考える」という思惟の働きを有する実体としてとらえていたが、カントによると、この説は、「考える」という意識の統一性にすぎないものを、実在的な思惟実体とする誤謬を犯している。実体というものは、客観的な認識対象となりうるものであり、また、科学が扱うことのできる対象でもある。しかし、カントによると、魂は、「考える」という思惟の働きを備えてはいるが、客観的な認識対象ではなく、むしろ認識の限界を定め、目標を立てる理念である。魂が実体ではなく、理念的な存在だとすれば、魂は科学の方法では永久に扱うことのできない存在だということになる。

ところが、このようなカント説にも時代の制約が感じられる。それは、カントが、「認識」と「経験」を同義とみなし、人間の経験をすべて認識経験としてとらえたところにある。認識には必ず思惟の働きが伴うので、魂には思惟の働きが固有のものとして備わっている、と言わざるをえなくなるからである。しかし、人間には非認識的経験というものもある。これは認識経験のように意識的でも明晰判明でもなく、情動的で曖昧なものであるが、人間の経験としてはより基本的なものである。このような人間のすべての経験の要素を解釈する、より基本的な経験理論が、ホワイトヘッドの有機体の哲学で語られている。

経験の基礎は情動的なものであり、認識経験は情動的経験の基礎の上にはじめて成立するものである。人間は、個体発生的にも系統発生的にも、情動的経験をもっているが、通時的には、それは生命発生の太古にまで遡る遼遠な経験である。また、人間の身体は環境から多く影響を受ける。つまり、情動的経験は、共時的には、身体を介して宇宙へと広がっていく膨大な領域を占めている。

人間は、認識的であれ、非認識的であれ、さまざまな経験をしつつ生きているが、一個の人間としての人格的同一性は保たれている。この人格的同一性は、種々の経験に統一を課すことによってもたらされる。したがって、導入されるべき魂の定義は、「人間経験のあらゆる機会を受容しそれ自身の統一へともたらす場所」ということである。

この「場所」は本来、プラトンの自然哲学で、「もろもろの出来事に統一を課す」という役割を担っていたが、ホワイトヘッ

ドがそれを「人間経験のあらゆる機会」と読み替え、人格的同一性を保証する「場所」として用いることになった。彼はこの「場所」を「不可視で、無形相で、すべてを受容するもの」と特徴づけている。

従来の説では、身体と心と魂の関係は、「身体という容れ物に心魂が宿る」と表現されるが、新しい説では、「魂という場所において身心現象が生起する」と表現できる。前者では、心と魂が同類とみなされており、心が減びると同類の魂も減びることになる。しかし、後者では、身体と心が現象という点では同類であり、魂自体はそこで現象が生じる場所であって、現象そのものではない。したがって、身体が減れば心も減ぶが、魂は心とは類的に異なるものなので、永遠不変、不生不滅とみなせる。また、このような場所としての魂には、もともと形や大きさはなく、無限定である。

「場所」と「東洋的無」

この「場所」の概念は、西田幾多郎の「絶対無の場所」よりさらにいっそう、久松真一の「東洋的無」に親近性がある。というのは、久松にとって、本来の自己、真実の自己とは「無相の自己」であり、それはまた「東洋的無」でもあるからだ。「東洋的無」とは、私の外にある対象界としての空虚な空間ではなく、私自身の無的境涯、すなわち「無」である私自身のことである。

「東洋的無」の主要な性格は虚空性である。つまり、それは虚空のように内外の一切の諸現象によって妨げられることがない。しかも、それは心的または物的な一切の現象に行きわたって、遠近、大小、深遠、明暗等々に関わらない。さらに、東洋的無は広大であるが、それは他から限定されることがないから、限界というものが無いということであり、無限、永遠である。これは、東洋的無が、時空を超えて無限に広がる「場所」であることを意味している。

また、東洋的無は無相であるが、それは物的な形も、心的な相もないということである。つまり、東洋的無は、物的ないし心的の何かある物ではなくして、まったく限定を絶したものであり、真の清浄体である。これも、前節で述べたように、魂とはそこにおいて身心現象が生起する「場所」であって、それ自体は物的ないし心的な現象ではない、ということ想起させる。

さらに、東洋的無は、始めも終わりもなく不生不滅であり、左右上下を絶するから不動である。もちろん、幾何学的に計ることも、価値的に計ることもできないものである。つまり、東洋的無は、有無の無ではなく、有無をも越えて、有でもなく無でもないまったく限定を絶する無所住な主体的無である。

このように東洋的無は虚空によく似た性格をもっているが、しかし虚空そのものではないので、虚空にはない別の性格ももっている。それは、比喩的に「心」や「生命」と呼ばれる能動性ないし活動性であり、歴史的に現成する可能性としての形相である。久松に限らず、京都学派の哲学では、現実性としての存在のみを「有」と呼ぶ傾向があるので、それ以外のものは、たとえ可能性としての存在であっても、「無」と称されている。したがって、魂を「場所」とみなすとき、それは東洋的無それ自体ではなく、東洋的無の虚空性としての側面に局限される。

平成 23 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(2)

第 1 講：自死—死ぬなよ

佐藤 浩司

はじめに

これまで私が生きてきた中で、そう多くはないが関わりのある人の自殺に遭遇した。高校のクラスメート、大学の先輩、友人、信者さん、学生等々。近年、身近な人が自殺した。何故気付くことができなかつたのか。何故止めることができなかつたのか。もしかすると私が原因ではないのか。なんともいたたまれない気持ちになった。思い返せば、私自身も若い頃に死にたいと思ったことが幾度かはある。しかし、実行したことは一度もない。何故だったのか。自問してみる。

「平成 22 年中における自殺の概要資料」(警察庁生活安全局 2011 年 3 月 3 日発表)によれば、昨年の我が国における自殺者数は、31,690 人であった。これで 13 年連続 3 万人を超えたことになる。死因としては、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患、肺炎、不慮の事故に次いで 6 番目に多いことになり、年間死者数の約 3 %が、自殺によるもので、昨年に限れば、交通事故者数 (4,863 人) の 6.51 倍になる。

人口 10 万人当たりの自殺者数を示す自殺率を年齢別にみると(括弧内は平成 21 年度)、19 歳まで 2.4 (2.4) %、20 歳代 22.9 (24.1) %、30 歳代 25.6 (26.2) %、40 歳代 30.9 (32.1) %、50 歳代 36.6 (38.5) %、60 歳代 32.4 (33.5) %、70 歳代 28.4 (28.9) %、80 歳以上 29.0 (30.5) %で、平均 24.9 (25.8) %である(講座当日に配布した資料の数値に誤りがある。お詫びするとともに訂正して頂きたい)。

職業別にみると、58.9%と圧倒的に無職が多く、被雇用者・勤め人が 27.0%、自営業・家族従事者 8.6%、学生・生徒等 2.9%となっている。男女を比較すると(括弧内は自殺率)、男性 22,283 人 (35.9%) に対し女性は 9,407 人 (14.4%) と、男性の 2 分の 1 以下である。「自殺を考えたことがあるか」の質問に対しては、男女の比率が反対の結果が出ている。

自殺について、原因や動機を特定するのは難しい。多様で複合的要素が複雑に絡み合っていることが多い。また、当然のことながら年齢、性別、職業などによっても異なる。問題として取り上げられているものに、健康、経済・生活、家庭、勤務、男女、学校などが挙げられており、近年は、経済・生活問題によるものが急増している。若年層については、厭世、父母等の叱責、精神障害、進路問題、学業問題、恋愛問題が挙げられており、児童・生徒ではいじめによるものが多い。いずれも「うつ」などの精神的疾患の経過をたどることが知られている。

さて、本講座のタイトルは、「自殺」ではなく「自死」である。言葉としては同じ事象を示すが、「自死」は、その事象を反社会的行為であると責めないニュアンスがある。本稿では、紛らわしいので「自殺」を使用するが、本意は「自死」である。

1. 自殺に対する考え方

十数年前、神戸で起きた少年による児童殺害事件は、世の中を震撼させた。その後に関われた TV 討論の席上、ひとりの若者が「なぜひとを殺してはいけないんですか」と出席している多くの識者に向かって問いを發した。あまりにも唐突で、しかも根本的な問いになみいる識者は沈黙して、気まずい空気のまま番組が終わった。この問いに答えるため、各誌が特集を組んだ。数多の人間を殺戮してきた人類の歴史を振り返るまでもな

く、多くの命を頂くことによって自らの命を生きながらえてきた人間にとって、明確な答えを持ち得ないのは、当然のことと思われる。ただ、「ひと」という抽象的な対象ではなく、「あなた」「彼・彼女」とか具体的な対象を指して、「なぜ殺してはいけないか」と問われれば、別である。先の問いと同じように「なぜ自殺をしてはいけないんですか」という問いがある。具体的な対象は「私」である。痛みも恐怖も引き受けるのは自分自身だけである。そう問われると、先の問いよりももっと答えに窮してしまう。多くの宗教が人間の理性によっては解決しえない問いに答えるように、否、人間が答えられないが故に宗教が答えを用意しているのである。

宗教的な背景を持つ犠牲を除いて、自殺を積極的に認める民族はない。殊に伝統的宗教では、殺人と同じく禁止こそすれ、勧めも認めてもない。ユダヤ教、キリスト教では、人間の生死は、神が司る範疇で、人間がその権限を侵すことは罪であると考えられている。イスラームも同じで、「あなたがた自身を、殺したり害してはならない」と説いている。その意味で、自爆テロは決して許される行為ではない。仏教で殺生は、十悪の一つに数えられており、在家が守るべき五戒の一つでもある。また出家したものに厳しく科せられている四重禁戒の一つでもある殺人は、人を殺すだけでなく、他人に殺させることと共に、自殺及び自殺教唆も含んでいる。

天理教では、徹底した心の自由性から、自殺することもその自由性の範疇に入っていると考えられる。しかし、人間創造の原点が、互いに立て合い助け合って陽気にくらすことであり、その目的にかなった生き方が人間の生の方向性であるなら、自殺は、決して容認されるものではない。

2. 自殺を思いとどめさせる

自殺は、よいことではないと知っていても、それでも遂行するのは、「病氣」といつてしまえば身も蓋もなく、本当は、自殺したくないのに、追い込まれて自殺を遂行してしまうのである。決していくつかの選択肢があつて、自殺を選んだのではない。

したくない自殺をするのであるから、何らかの兆候がある。通常の仕草や物言いと異なることがある。これは自殺者のサインである。このサインに気付くためには、日常に良好な関係性を保っていることが大切である。自殺者の周囲の人が、後になって考えればと気付くのは約 20%程度であるという。重要なのは、自殺者の 72%が医師に相談をしていることである。医師と患者だけの場に、できる限り近親のものと一緒にいることがのぞまれる。自殺の手段は、日本の場合、72%と圧倒的に縊死が選ばれ、しかも自殺の場所は、54.3%が自宅である。自殺者は、死にたくはなく、家族に気付いて欲しいのである。

自殺を思いとどまった人の話によると、実行しようとしてもできないのは、近親者による「死ぬなよ」「生きていてね」との言葉を思い起こすことによるという。「死ぬなよ」の語りかけは、とても大切なのである。また、人間一人ひとり、ティリッヒのいう「存在への勇気」、つまり、個々人の存在の意味と、存在することによって現れてくる種々の苦悩、困難、「それにもかかわらず」自己自身を肯定すること、この勇気がもてるようになることが大切である。自殺未遂者は、再遂行のおそれがある。この場合、共に祈ること、さらには、他の人の悩みや苦しみに関わり、その救いの場に身を置くようになるよう導くことが、思いとどまらせる鍵となる。

ペルシャ古典音楽演奏会

佐藤 浩司

ペルシャ古典音楽の演奏会を、文化交流プロジェクト「アルクチダの子孫」のタイトルで、去る4月20日午後6時より、天理文化センターを会場に、天理大学雅楽部とロシア国立チャイコフスキー記念モスクワ音楽院との共催で開催した。当初、東日本大震災の影響で、開催が危ぶまれたが、日本を音楽で元気づけたいとの演奏家達の熱意で、「復興チャリティーコンサート」として漸く開催に漕ぎつけたものである。開会に先立ち震災でお亡くなりになった方への慰霊と、行方不明の方の発見、そして被災された方の一刻も早い復興を祈念して、黙祷が捧げられた。先ず、マルガリータ・カラティーギナモスクワ音楽院教授が挨拶に立ち、イランの優れた演奏家を天理で紹介できる喜びと、この演奏会によって、早い日本の復興が実現できるようにと述べた。

演奏は、Ghorbeh (とつくに) と、Sarzamin-e-man (我が故郷) から Nahoft (私とあなたなら) の2曲を、ヴォーカルのホセイン・ヌールシャルが、自ら作詞した歌を、サントウールのベジュマン・エフチャリが作曲、他にアシュカン・ラフバルのタール、カウエフ・モタメディアンのカマンチョ、ダリウシュ・チャボシのトムバック及びダーフの伴奏で、朗々と歌い上げた。ペルシャ古典音楽の伝統にしたがった新作歌曲の演奏に、聴衆は、しばし至福の時を過ごした。なお、今回の公演は、天理大学雅楽部とロシア国立チャイコフスキー記念モスクワ音楽院との2000年に始まる相互交流の一環として実現したものである。

(訂正) 前号で報告した第7回伝道フォーラム「ネパールの天理教」の記事について、以下のとおり訂正いたします。

ビレンドラ皇太子(1945～2001)は1967年当時東京大学に留学、同年、東大からハーバード大学に留学し帰国されていた故松本滋氏(天理教谿郷分教会前会長)が皇太子のお世話取りをされ後々まで交流を深められた。(堀内記)

「**教学と現代VIII**」のお知らせ

天理総合人間学研究室

来る8月27日に、おやさと研究所夏期特別講座「教学と現代VIII」を開催いたします。今回のテーマは、東日本大震災における天理教の救援活動と今後の展開を考えるとというものです。

天理教では、東日本大震災に際して、さまざまな救援・支援の活動を展開してきました。全教あげてのこれらの活動を振り返り、大震災という“大節”をどう受け止めたらいいか、また今後の復興支援に向け、お道の“ようぼく”として私たち一人ひとりに何ができるかについて、考えてまいりたいと存じます。

詳細は、次号の『グローバル天理』にて案内をいたします。

(7頁からの続き)

基本的人権、人間の尊厳を認めない共産主義は、1962年から1964年まで2年以上審議された第二ヴァチカン公会議で、超克すべきものであるという結論がだされていた。しかし、共産主義圏で生まれ育ったボイテューワ(ヨハネ・パオロ2世の本名)氏がローマ法王になった。また共産主義の内部改革を訴えたゴルバチョフがソ連に登場し、アメリカのレーガン大統領を含む三者はそれぞれに対話を繰り返した。方法論は異なるが結果的には、1989年にはベルリンの壁が崩壊し、親ソ連国家も独立していった。ヨーロッパにおける共産主義は音を立てて崩れ始めた。ポーランドのワレサ氏などは、本当にヨハネ・パオロ2世を尊敬し、慕っていた。イタリアの歴代の大統領ペルティエニ、スカルファロ、コシーガ、チャンピたちとも相互に訪問し、親しかった。

ヨハネ・パオロ2世は対話を重要視した。対話が世界を変えるというのである。そのために、1986年10月27日、世界の諸宗教の代表者をアッジに招待し、「世界宗教者の平和の祈りの会」を主催している。その時の精神は「アッジ・スピリット」として世界的に知られている。また、2001年のニューヨーク同時多発テロ事件を受けて、2002年1月24日世界の宗教の代表者を招集し「平和の祈りの会」を開いている。こうした世界の宗教者による平和の祈りという動きは、1987年よりローマの聖エジディオ共同体によって受け継がれているし、日本でも1987年より天台宗主催により「比叡山サミット」として続けられている。

彼は1986年にはローマにあるユダヤ教のシナゴグを訪問している。法王がシナゴグを訪問するのは彼が初めてである。2001年シリアを訪問した折には、イスラム教のモスクに入り込んでいる。1999年にはジェノヴァにおいて、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の代表者が寄り集い、会談している。

また彼は、子供を、女性を、若者をととも愛した。毎週水曜日午前中に、ヴァチカンで法王の一般謁見が開かれる。その時に、自分の通るところに、赤ん坊がいればその頭に、また抱き上げて接吻していた。女性に会う時には、その女性の肩に、頭に親愛の情を込めて手を差し伸べ、その額に接吻して語っていた。それは特に聖母マリア崇拜の賜物だったのだろうか。彼は小さい時に実の母を亡くしている。クラクフの教会の聖母像、黒のマドンナを大切に、ポルトガルのファティマの聖母マリア、フランスの聖地のルルドの聖母マリアを大事にした。ファティマの聖母マリアの日は5月13日だが、彼は、1981年5月13日午後5時25分に、トルコ人アリ・アグジャによって狙撃された。狙撃から病院に行くのにわずか17分だけだった。奇跡のような短時間だった。そして、奇跡的に救かったのは、聖母マリアのお陰と言われている。彼のモットーは「TOTUS TUUS」(すべての物はあなた、聖母マリアの物)であって、彼の日々の通り方に聖母マリアへの思いが込められている。

2000年8月には、ローマ郊外トッレ・ヴェルガータに200万人の若人を集め、共同ミサをあげ、未来はあなた方の双肩にかかっていると期待を寄せた。この時の若者たちがパーバ・ボーイズとして知られ、ヨハネ・パオロ2世の大いなる信奉者である。